

# 庚申講こうしんこうに見る東洋医学的養生法（1）

## — 三戸さんしの陰陽五行分類 —

松田 昌子

倉敷芸術科学大学生命科学部

（2011年10月1日 受理）

### I. はじめに

あるところに曰くありげな石像が置かれ、そこに「体の悪いところと同じ部位を撫でるとその部分がよくなる」と書いてあった。このような場面に会った時、思わずしばしの間撫でてしまうことがある。たとえその石像に関する治癒作用の根拠が不確かだったとしても、時と場合によりあるいは好奇心からでも、効果に対する期待を寄せることがまったくないとは言いきれない。

2006年に行われた東京都23区民を対象とした呪術に関する意識調査によると、呪術的行為・態度や思考に関連すると考えられる年中行事について、回答者の4割に呪術的な何らかの意味合いを重視する傾向が認められた<sup>1)</sup>。祈願の呪術の効果については、運命を肯定的に捉える人ほど、「意味がある」とする意見の割合が高い<sup>2)</sup>。科学が主流の現代においては、年中行事が本来持つ呪術的な意味は、非科学的な俗信・迷信の部類に入る。しかし、日常生活の中に根付いた年中行事に込められた効果について、無意味だと否定している人は少なく、たとえ行為自体の効力を否定したとしても、心理的に意味がないものとは捉えられていない<sup>3)</sup>。

「庚申講こうしんこう」あるいは「庚申待まち」は道教由来の呪術で、かつては不老不死や長生きを欲する人々の間で、1,000年以上もの間、各自の信仰とは関係なく地域の行事として行われてきた。道教は遣唐使が持ち帰った多くの経典とともに我が国に伝来したと考えられている。陰陽論・五行説を土台に道教の思想や倫理は仏教・神道、儀式は陰陽道・年中行事、医術は鍼灸・按摩・漢方薬などの分野に取捨選択され独自に発展した<sup>4)</sup>。しかし現在では、陰陽論・五行説を共有する年中行事と鍼灸の間に、共通事項を見ることはあまりない。その理由に鍼灸治療は長い間、訴える症状の早期改善を第一にしてきたことや、年中行事と東洋医学との関連性を検討するに値するニーズが少なかった等が考えられる。

年中行事は季節の節目に行われるものが多いが、急激な気候の変化には体調を崩すことも多い。そこで、予防医療を考える上で、心理的効果を包括する年中行事の関連する事象を検討することを試みる。養生法のヒントとなる要素が明らかになれば、心身一如を重視する鍼灸に応用することも可能と思われる。

本稿はこうした観点から60日ごとに行われる庚申講を取り上げ検討する。

## Ⅱ. 本 論

### 1. 庚申講の概要

「講」とは同じ信仰を契機とした地域社会の集団をいう<sup>5)</sup>。「庚申講」とは、干支の庚申に当る日に眠ると、人の体内にいとされる三尸という虫が、人の命を短くするといった伝承をもとに、庚申の日には皆で村の一か所に集まる「日待ち講」の一種である。その日は御神酒や供物をささげ、勤行や飲食こんぎょうをしながら夜半まで過ごす。多くの場合、各自の信仰とは別に、村行事の一つとして行われている<sup>6)</sup>。

#### (1) 庚申講の変遷

庚申の日に集まる催しは、平安時代の歴史書『日本紀略』によると、天慶二年(939年)が始まりだったという。その年には内裏で初めて「庚申の御遊ぎょゆう」があったと記される<sup>7)</sup>。当時は漢文風に「守庚申」とも呼ばれ、公家や武家など上流階級の人々の宴遊として行われていた<sup>8)</sup>。その後、時代を経るにしたがって庚申待、庚申祭など呼び名が様々となり、仏教の布教活動や神仏習合の形をとって日本各地に広がったが、現在では一部の農村部で行われる講として残るのみである<sup>9)</sup>。

#### (2) 現在の庚申講

地方により多少の違いはあるが、共通して次のような内容となっている<sup>10)</sup>。

##### 1) 供物をささげる。

- ① 豆、小豆が多い。 ② 餅や団子などの丸いもの。 ③ 七色の菓子。

##### 2) となえごと(勤行)を行う。

- ① しや虫はいねや 去りねや 我が床を(身体は)寝たれと、(目は)寝ぬそ、寝ぬそ寝たれそ(藤原清輔『袋双紙』)。  
 ② ショケラよ、ショケラ、寝たかと思って見に来たか、寝たれど寝ぬぞ、まだ目は寝ぬぞ(福井県美浜町)。  
 ③ 「話は庚申の晩に」といい、雑談の内容は問わずなるべく長い間話をする。

##### 3) 庚申の神様は、「七」と関係が深い(後述)。

##### 4) 庚申の日の禁忌

- ① 「赤不浄」といって出産、月経など血に関することを嫌う。 ② 男女の交わり

### 2. 三尸の伝承

三尸は、後漢代に書かれた道教の基本書『抱朴子ほうぼくし』(葛洪かつこう)で、次のように説明される<sup>11)</sup>。

三尸は人の体内にいる靈魂・鬼神の類である。人が死ねば虫自体は幽霊となって死者を祭る供物を食べることができるため、その人を早く死なせたいと思っている。

そこで庚申の日になると天の司命(命を司る神)にその人の犯した罪を報告する。司命は罪の軽重に随い、悪事はなくとも悪心がある者には算(3日)、悪事があれば

紀(300日)を奪う。

庚申の日に人が眠ると三尸が身体から抜け出し、天で罪過を告げその分寿命が短くなるため、眠らなければ長生きできる<sup>12)</sup>。三尸は人々を道教に帰依させる手段や方便として登場し<sup>13)</sup>、その後時代を経るごとに禁忌や駆除法が考え出された。

唐代になると、三尸は『太上三尸中経』の中で、これまで考えられてきた靈魂の類から、身体各部位に存在する三匹の「尸虫<sup>ししむし</sup>」へと変容する。そして庚申待を三回やれば三尸をおそれさせ、七度やれば永久に絶えるといわれた<sup>14)</sup>。

尸虫の位置や性質を以下に紹介する。

#### (1) 上 尸

名を彭偪<sup>ほうきよ</sup>という。人の頭の中において、首から上を病気にする。眼がみえなくなり、はげ、口がくさくなり、顔にしわがより、歯が抜けるのは、上尸の仕業である。

#### (2) 中 尸

名を彭質<sup>しつ</sup>という。人の腹の中において、五臓を病気にする。元気がおとろえ、忘れがちになり、悪事をするのを好み、肉を食べたがり、夢かうつつかわからなくなるのは、中尸の仕業である。

#### (3) 下 尸

名を彭矯<sup>きょう</sup>という。人の足の中において、下関<sup>げかん</sup>を騒がせる。五情が騒ぎ淫乱になるのは、下尸の仕業である。

### 3. 三尸に関する事象分類

陰陽思想の宇宙構造と地上の生成・変化をまとめた『淮南子』(天文訓)では、万物は陰陽の精気からつくられたと述べられている<sup>15)</sup>。そこで庚申の行事に関連する事象の中でも、最も正体不明である三尸について、具体的な形で現すために陰陽で分類することを試みた。

#### (1) 陰 陽

陰と陽を表現した中で、記号で明らかにしたのが易の「八卦<sup>はっけ</sup>」、数字で表現したのが「河図<sup>かと</sup>」、「洛書<sup>らくしよ</sup>」である。

##### 1) 記 号：八 卦

###### ① 三尸の位置を表す「爻<sup>こう</sup>」

易で用いる陰陽の記号を「爻」という<sup>16)</sup>。爻に物事の理を形容した説明を加えたのを「爻辞<sup>こうじ</sup>」という。まずは三尸を陰爻と陽爻に分けてみた。

- 三尸は人の体内に棲んでいる。  
「体内」の性質は陰である。陰爻は「■ ■」で表される。
- 人が起きている間は体内から外に出ることができない。

「活動」の性質は陽である。陽爻は「**—**」で表される。

② 三尸の行動を表す「八卦」と「六十四卦」

陰陽の爻が八卦へと展開する過程は、「易の太極（**—**）が陰陽の両儀（陽**—**、陰**—**）、四象（老陽**—**、少陽**—**、少陰**—**、老陰**—**）、八卦（乾**—**、兌**—**、離**—**、震**—**、巽**—**、坎**—**、艮**—**、坤**—**）を生ずる」『易経 繫辞上傳』（第十一章）、「一を二分、四分、八分する」『易経 説卦伝』、「陰陽の三爻を下から下爻・中爻・上爻の順に地・人・天の位とした」『繫辞上傳』（第一章）など諸説に見られる<sup>17)</sup>。『説卦伝』（第三章）では八卦と八卦が重なることで森羅万象が表現される<sup>18)</sup>と説明される。

陰陽のシンボルである爻を三本合せた記号を「卦爻」といい、卦爻に「吉凶（善悪）悔吝（過失）」などの説明をつけたのを「卦辞」という<sup>19)</sup>。易の卦辞について、朱子は『語類』の中で「あらかじめ述べられているもの」と説明する<sup>20)</sup>。つまり、卦辞は占いの亀卜や筮竹などの結果というよりは、森羅万象を言葉で明示し、さらに記号化したものであるといえる。

次に三尸の行動に相当する卦爻から、卦を求めてみる。

- 三尸は人が「起きている（陽）」間は「体内（陰）」から天へと昇ることができない。

自然の作用を説明する『説卦伝』（第四章）で説明される、「物を止める」作用を象徴する卦は「艮 **—**」である<sup>21)</sup>。

- 六十四卦の52番目にある艮（図1）の爻辞は初爻（下の段）より「その趾に艮まる、その腓に艮まる、その脛に艮まる、その身に艮まる、その輔に艮まる、艮まるに敦し」である<sup>22)</sup>。止まるべき所に止まれば、動くことはない、という意味である。

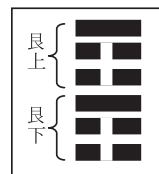


図1 六十四卦の艮（艮上艮下）

- 「人が起きている間は止まる」を意味する卦が艮ならば、「起きる」の反対語「眠る」に相当する卦は、艮の対極にある卦「兌 **—**」が充てはまる。また、『説卦伝』（第三章）では艮は山、兌は沢を表す。山は地下水を沢（または谷）に下ろし、沢の気は山で雲となるので、山と沢は互いに気が通じるという<sup>23)</sup>。このため、艮の反対の兌は単なる対極位置や、凸凹で表される山と沢の形状の相対関係の他に、自然循環や気象の観点からみても、互いが陰と陽の関係に相当する。『説卦伝』（第四章）では兌は物を萎やす形を象徴する<sup>21)</sup>。また朱子は兌を「山から沢に下りた水が万物を潤し悦ばせる」と解釈する<sup>24)</sup>。
- 六十四卦の58番目にある兌（図2）の爻辞は「和して兌ぶ、孚ありて兌ぶ、来りて兌ぶ、商りて兌ぶ、剥に孚あれば厲きことあり、引きて兌ぶ」である。

「剥に孚あれば厲きことあり」とはみだりに人をよるこばせ、剥がし落とすという意味である<sup>25)</sup>。兌は八・口・人からなり、口から出る喜びを表すものに「言葉」がある<sup>26)</sup>。

このため三尸の立場から兌を説明すると「天で人の罪を告げ、人の寿命が縮まるのを悦んでいる」様子という解釈も成り立つ。

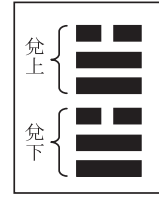


図2 六十四卦の兌 (兌上兌下)

③ 庚申待における三尸の行動の一部始終を表す六十四卦

- 人が起きている間の三尸は「止まり進まない」という象徴の艮が充てはまる。人は地上にいるため、艮は天に対する地、つまり下卦の位置となる。これを「艮下」という。人が眠ると三尸は「喜び」、兌となり、体内から抜け出し天に昇る。天は上部にあるため、兌は上卦に位置する。これを「兌上」という。
- 「艮下兌上」に相当する六十四卦の卦は31番目の咸<sup>かん</sup>(図3)である。咸の卦辞は「陰陽相交わり、感應する様」とあり、爻辞は初爻より、次のように記載される<sup>27)</sup>。

- 初六、足の親指に感じる。<sup>しよりく</sup>
- 六二、ふくらはぎに感じる。<sup>りくじ</sup>
- 九三、もも(股)に感じる。
- 九四、心が物に感じる。
- 九五、背中の肉に感じる。
- 上六、上顎、頬、舌に感じる。<sup>じょうりく</sup>

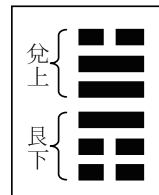


図3 六十四卦の咸 (艮下兌上)

2) 数 字：河図と洛書

庚申待で用いられる数字の「七」は、いくつかの伝承に共通して登場するため、重要な意味があると考えられる。「三尸の駆除に守庚申を七度行<sup>14)</sup>」、「庚申の七色菓子<sup>28)</sup>」、「庚申さんは七を尊ぶ<sup>29)</sup>」、「庚申夜祝尸虫法：七回齒を嚙みあわせながら三尸のいる身体各部を叩き、呪文を唱える<sup>30)</sup>。」等である。このため河図と洛書を用いて七について分類してみた。

① 河 図

河図は一から十までの数字を上下左右の天地陰陽にそれぞれ当てはめてできあがった図である。河図を図4に示す。図5は、河図に具体性を持たせるため、『繫辞上傳』(第一章)にある「天は尊く地は卑く、乾坤定まる」の記述に従い、天地に乾坤を定め、その間に八卦の象と数字を充てた模式図である。九と十には対応する八卦がないため省いた。

『繫辞上傳』(第九章)の「天(陽)の数は一・三・五・七・九、地(陰)の数は二・四・六・八・十である。一と二、三と四のように対をなしている。」との説明<sup>31)</sup>通

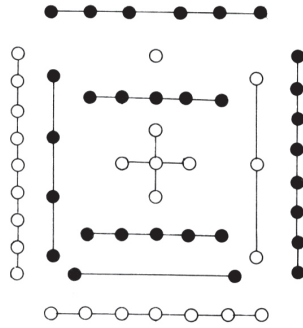


図4 河図（中村璋八『周易本義』より転載）

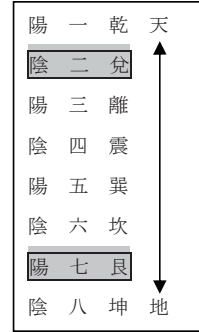


図5 天地の間にある八卦

りに、上下に天と地を定め、陽・陰・数字を交互に対応させていった関係を示す。

以上、河図を基に分類すると、二は兌で陰、七は艮で陽となった。これにより、陰陽分類で、人が起きる陽の時は三戸が止まる艮卦で、その時に当てはまる数として七、人が眠る陰の時は三戸が天に昇る兌卦で、当てはまる数に二が示された。

② 洛書

河図は天地・陰陽を一から十で表したのに対し、洛書は自然現象を一から九で表している。九が最大数になる理由として『淮南子』（天文訓）では、物事の始めを「道は一より始まる。全一は何も生じないため、二つに分かれ陰陽となる。陰陽は和合して万物を生じる」から「一は二を生じ、二より三を生じ、三が万物を生じる」と説明<sup>32)</sup>する。三は万物の基本の数であり陽である。このため、三の倍である九は陽の極まりとなる。数字は一から始まるため、一（奇数）は陽気の始まりを表し、そして陽気は季節に応じて発生する<sup>33)</sup>。よって奇数の最大数である九は自然現象の極まりを意味している。

洛書の図から、五を中心に据え、陽気の始まりと極まりを示す一と九を上下、陽気を示すあいだの奇数を左右、四隅に偶数配置し、さらに方位に八卦を配置したのを九宮という<sup>34)</sup>。洛書から方位に八卦を配置すると「七に西、八卦は兌」となる。九宮に八卦を配置させた図を6に示す。

以上、天地陰陽を表す河図では七に艮卦が示され、自然現象を表す洛書では七に

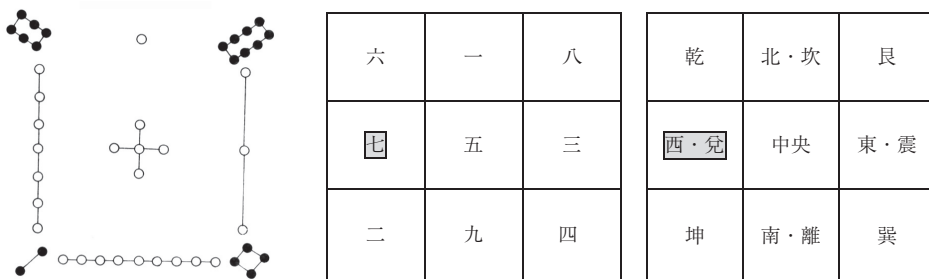


図6 洛書（中村璋八『周易本義』より転載）と九宮

兌卦、そして方位の西が加わった。洛書については、庚申との関連性を含め稿を改めて検討することにした。

## (2) 五行

庚申待と三尸に関係の深い数字について、数字を五行に当てはめた書経と礼記の記載に従い、陰陽から五行へ発展させてみる。

### 1) 生数しょうすうと成数じょうすう

#### ① 生数

一から五までの数は「始めの数」で、「万物が生成する数」という意味で「生数」という<sup>35)</sup>。

『書経(尚書)』(洪範)では五行を「すべての物が成立し変化する原因」として「一曰水。二曰火。三曰木。四曰金。五曰土」と説明する<sup>36)</sup>。さらに、二は『繫辞上傳』(第九章)で地・陰の数と説明される。書経でいう一から五までの生数と五行を並べると次のようになる。

- 生数(書経)

一、一、三、四、五  
水、火、木、金、土

#### ② 成数

五から九までの数は『礼記』(月令第六)で説明される<sup>37)</sup>。

『礼記』(月令第六)は事を成すことを尊ぶため「成数」を述べていると『五行大義』(卷第一)でいう。生数との関係では、「生数では働きを成すことができないため、五(土)を用いて成数とした。」と説明する<sup>38)</sup>。礼記でいう五から九までの成数と五行を並べると次のようになる。

- 成数(礼記)

五、六、七、八、九  
土、水、火、木、金

庚申と関係の深い七は生数・偶数・陰である二(火)に奇数・陽である五(土)を合わせることで陰陽和合し、「二+五」で成数の七となる。働きを成さない生数二に五を加え成数七とすることで、火は土の上で燃え上がることができる<sup>38)</sup>。

## Ⅲ. 結論

### 1. 記号と数字化された三尸の姿

通常、数字は単位とともに何かを数える時に用いるが、陰陽分類する場合は三尸の姿を表現する記号の一種と捉えることができる。ここで分類したことを改めて整理してみる。

#### (1) 人が寝ている間の三尸と赤不浄

人の体内に潜んでいる間は三尸の性質は陰であるが、人が眠ると、存在する場所が体内から体外へと変わるため性質は陽となる。河図で示された「陰・兌・二」は、庚申の日に人が眠れば、人の寿命を縮めさせることができると「悦ぶ」三尸の姿を表していると解釈できる。つまりここでの兌は、今はまだ人の体内の陰に潜む三尸の状態を表していると考えられる。

その時の数字である二は、生数「変化の原因」を意味し、五行では火を表す。五行分類で火気を示す色は赤であるため、庚申の日の禁忌である「赤不浄」は、人が寝ると体内の三尸が変化するといわれ、その「変化の原因」を象徴する数「二」の五行「火」を象徴する赤色を避けることでもあると考えられる。

つまり赤には「三尸を変化させる原因」が含まれているため、禁忌として赤不浄にしたと考えられる。言い換えれば、赤不浄には三尸を封じ込めるという意味が含まれていたとみることができる。

## (2) 人が起きている間の三尸と庚申待の七

人が起きている間は「止まる」を意味する艮であるが、それが河図で示された「陽・艮・七」となる訳は、本来三尸は陰の性質を持っているが、人が眠ると体外に出て天に昇るために、河図で体外と天で象徴される陽に変化することができるという、その性質をここで示したと考えられる。しかし三尸は人が起きている間は体外に出ることができない。

その時の数字である七は、成数「物事を成し遂げる」を意味する。つまり、「三尸の駆除に守庚申を七度行う」、「庚申の七色菓子」、「庚申さんは七を尊ぶ」、「七回歯を噛みあわせながら三尸のいる身体各部を叩き、呪文を唱える」等の伝承に共通する七は、三尸の「人が起きている間は体外に出られない」状態が「成立」する七であると考えられる。さらに、二(火) + 五(土)で導き出される七は、火が土の上で「炎上」する様子を表す。七は三尸の駆除法を象徴するが、ただ単に駆除するだけでなく、二で象徴される三尸を炎上させ焼き尽くすことを意味する七でもある。

また、二で象徴される三尸の変化させる原因の火が、駆除時に燃え盛り炎上するのは、一定の条件下で正反対の方向に転化する「陰陽の相互転化<sup>39)</sup>」の法則と一致している。すなわち、変化のもとである火の二が七となることで、七は三尸を駆除するための火に「成った」という意味がそこに込められていると考えられる。

以上のことから、生数二の火気は三尸の望みを意味するため禁忌に定められ、成数七の火気は三尸の駆除と関連が深いため、駆除の意味で、講で奉納する供物やまじないの中に取り入れられたと推察する。

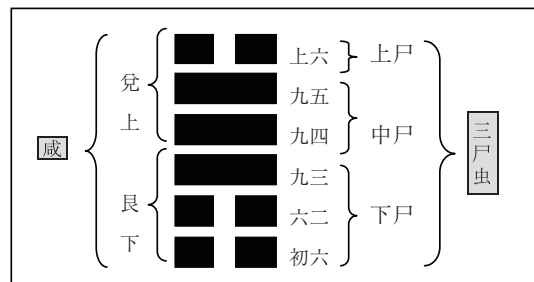


図7 咸の卦と三尸虫



### (3) 六十四卦の中に示される三尸

三尸を六十四卦に組合せると、「咸」が示されたが、咸の爻辞は太上三尸中経に記される三匹の尸虫の位置とも、ほぼ一致する。

図7は初爻から上爻に向かい、下尸、中尸、上尸と尸虫が棲む位置にそれぞれ対応し、咸が三匹の尸虫の隠喩として表象されていることを示す。さらに見方を変えれば、人の体内にいる間の三尸の状態「艮下」が、人が眠ると天に昇り「兌上」となるのが、庚申の日にたまたま眠り合わせてしまった時の三尸の動態をイメージさせる。

咸の卦辞「陰陽相交わり、感應する様」は男女の交わりを意味する。庚申の禁忌である男女の交わりは、咸の卦辞と同じである。つまり庚申の日に男女の交わりを行うことを禁忌とした理由として、単に疲労で生じる眠気を避けるためという生理的現象による理由の他に、同じことをすれば、三尸が天に昇り「兌上」が起きてしまうため、そのことを避ける意味もあったと考えられる。要するに咸の爻辞が三尸を連想させるがゆえに、卦辞に象徴される行為そのものを禁忌としたと解釈することができる。

## 2. 呪術の中に見る知恵と技術

呪術とは「ある目的を達成するための手段・方法として超自然的な存在や力を利用しようとする営み」のことをいう<sup>40)</sup>。このような定義の観点からみれば、道教由来の庚申講は「長寿」を願うために供物をささげ勤行を行う講であるため、呪術の形をとっているといえる。19世紀に呪術的なものの考え方の心理作用について述べた『金枝篇』(フレーザー)では、呪術には「類似の法則」に根ざした「類感呪術・模倣呪術」と「接触あるいは感染の法則」に根ざした「感染呪術」の2種類があると述べている<sup>41)</sup>。

### (1) 類感呪術としての七と赤不浄

類似は類似を生むという類感呪術は、危害を加えたいときは、似た物を作っては破壊し、増やしたいときはいくつも作り奉納するという方法がとられる<sup>42)</sup>。

庚申に関わりの深い七は、三尸の駆除を象徴する数字である。「庚申の七色菓子」や「七回行う」など庚申講のいくつかの場面で七が登場する理由には、類感呪術の手法を用いて、三尸を駆除する象徴を増やして、相乗効果を出すためだったと見ることができる。また、三尸が体外に出て変化することを象徴する火を禁忌とする赤不浄については、類似が類似を生む原則を応用した「増やしたくないから禁忌にした」という考えが含まれる。

### (2) 呪術の効果と心理作用

『金枝篇』では、呪術行為は人を導いて惑わし、自然の法則の体系に見せかけたまやかしの科学であると述べられる。しかし、たとえまやかしだったとしても、呪術が人の心に影響を与える心理的作用まで否定することはできない。庚申講の場合は、個人の信仰とは関係なく行うものだが、その中には行われるべき手順や所作、やってはいけない禁忌などが含まれる。そして集団で行う場合は、村の中の人間関係の規範意識を高めることにつな

がり、個人で行う場合は、誤った事をしないように自主規制を実践する機会になっていると考えることができる。このような意味で呪術は、惑わしやまやかしを超えて、人間関係の調和をとるための役割を担うことができると考えられる。

また、三尸の分類に用いた易の理論に含まれる理念を無視するわけにはいかない。なぜなら、易経の総論にあたる『繫辭上傳』（第七章）では「易は自己の徳を高め、事業を広くするためのものである<sup>43)</sup>」と述べられているからだ。易は森羅万象を示し未来を占うものだけにとどまらず、自然に対する畏敬の念と人の行動に謙虚さと道徳的規範を持たせることも兼ねている。三尸の位置、行動、状態が、艮・兌・咸などの卦辞で説明できたことから、三尸の存在の中にも易の理念があると思われる。三尸は人々を道教に帰依させる方便として用いられたが、別の言い方をすれば、道徳的規範の中心となる象徴でもあったと考えられる。

### (3) 三尸の正体

庚申講で行う一連の行事において、三尸の存在は「人の体内に棲む寿命に関する虫」として位置づけをされているが、そのような虫の存在が実証されたことはなく、昔の人は人の寿命については「何かに左右されているのかもしれない」という憶測の域をでなかった。庚申講・庚申待とは「健康で長生きしたい」という願いを「体の中にあるなにか」に働きかければ、変えることができるかもしれないという願望と社会的規範を結びつけ、集団心理に働きかけようとした知恵や技術でもあったと考えられる。

現代では「寿命を左右する体の中にあるなにか」は遺伝子をはじめ、病気に抵抗する体力、免疫力、回復力などに大体は左右されているとの認識を持つが、情報に乏しかった時代では「なにか」が何の理屈であるかが分からなかった。そこで、目には見えないが存在する病気・老い・死に対する抽象的なイメージを明確にするために、三尸虫あるいはショケラなどのキャラクターに仕立てあげ、人々が納得できるように呪術として行事を成り立たせていったと推測される。

### (4) 予防医療に生かす庚申待

「みんな健康で長生き」は今も昔も変わらず、誰もが持つ願いである。しかし現代では核家族化が進み、個人の自由が尊重され、地域社会で世代間の上下関係が薄くなりつつある。このため、信仰の形をとった俗信や迷信とも捉えられかねない類のために、価値観の異なる他人同士が集まって長寿を願う講を行うのは、年代を経るごとに困難となっていくと思われる。

次稿では同じ理論に基づきつつも信仰の形によらない方法で長寿を願うべく、陰陽五行で分類した三尸の駆除法をもとに、鍼灸療法をいつ、いかなる方法で、どの程度行うのか検討させていただく。(つづく)

## IV. 参考文献

- 1) 竹内郁郎, 宇都宮京子. 呪術意識と現代社会. 第1刷. 東京, 青弓社. 2010 : 89-90.
- 2) 竹内郁郎, 宇都宮京子. 呪術意識と現代社会. 第1刷. 東京, 青弓社. 2010 : 220-221.
- 3) 竹内郁郎, 宇都宮京子. 呪術意識と現代社会. 第1刷. 東京, 青弓社. 2010 : 241-247.
- 4) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 242-248.
- 5) 大塚民俗学会. 日本民俗辞典. 初版. 東京, 弘文堂. 1988 : 243.
- 6) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 4-12.
- 7) 島田勇雄, 竹島淳夫, 樋口元巳. 和漢三才図会 1—寺島良安. 初版. 東京, 平凡社. 2005 : 250.
- 8) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 126-133.
- 9) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 249-265.
- 10) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 57-112.
- 11) 本田濟, 抱朴子 内篇—葛洪. 初版. 東京, 平凡社. 1990 : 427-441.
- 12) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 177, 180, 248.
- 13) 本田濟, 沢田瑞徳, 高田三良. 抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経. 初版. 東京, 平凡社1994 : 554.
- 14) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 196-197.
- 15) 戸川芳郎, 飯倉照平. 中国古典文学大系 第6巻 淮南子・説苑(抄). 初版. 東京, 平凡社. 1998 : 25
- 16) 中村璋八. 周易本義. 第3版. 東京, 明德出版社. 2005 : 8.
- 17) 中村璋八. 周易本義. 第3版. 東京, 明德出版社. 2005 : 32, 33, 35.
- 18) 本田濟, 易. 第6刷. 東京, 朝日新聞出版. 2010 : 528-530.
- 19) 本田濟, 易. 第6刷. 東京, 朝日新聞出版. 2010 : 616-617.
- 20) 三浦國雄. 「朱子語類」抄. 第1刷. 東京, 講談社学術文庫. 2008 : 271-275.
- 21) 本田濟, 易. 第6刷. 東京, 朝日新聞出版. 2010 : 618.
- 22) 中村璋八. 周易本義. 第3版. 東京, 明德出版社. 2005 : 221.
- 23) 中村璋八. 周易本義. 第3版. 東京, 明德出版社. 2005 : 33-34.
- 24) 本田濟, 易. 第6刷. 東京, 朝日新聞出版. 2010 : 472.
- 25) 中村璋八. 周易本義. 第3版. 東京, 明德出版社. 2005 : 240-242.
- 26) 本田濟, 易. 第6刷. 東京, 朝日新聞出版. 2010 : 623.
- 27) 中村璋八. 周易本義. 第3版. 東京, 明德出版社. 2005 : 150-153.
- 28) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 42-43.
- 29) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 58-59.
- 30) 窪徳忠, 庚申信仰. 第10版. 東京, 山川出版社. 1990 : 221.
- 31) 中村璋八. 周易本義. 第3版. 東京, 明德出版社. 2005 : 30-31.
- 32) 戸川芳郎, 飯倉照平. 中国古典文学大系 第6巻 淮南子・説苑(抄). 初版. 東京, 平凡社. 1998 : 33
- 33) 中村璋八, 古藤友子. 五行大義 下. 初版. 明治書院. 東京. 2008 : 12.
- 34) 中村璋八, 古藤友子. 五行大義 上. 初版. 明治書院. 東京. 2008 : 120-128.
- 35) 中村璋八, 古藤友子. 五行大義 上. 初版. 明治書院. 東京. 2008 : 88-92.
- 36) 加藤常賢. 新訳漢文大系 第25巻 書経 上. 第6版. 明治書院. 東京. 1988 : 148-152.
- 37) 竹内照夫. 新訳漢文大系 第27巻 礼記 上. 第15版. 明治書院. 東京. 1988 : 148-152.
- 38) 中村璋八, 古藤友子. 五行大義 上. 初版. 明治書院. 東京. 2008 : 95-99.
- 39) 教科書執筆小委員会. 東洋医学概論. 第1版. 医道の日本社. 神奈川. 2000 : 12.
- 40) 佐々木宏幹, 村武精一. 文化人類学. 初版. 有斐閣. 東京. 1994 : 141.
- 41) ジェームズ・フレーバー. 図説 金枝篇. 第6刷. 東京書籍. 東京. 1997 : 60-61
- 42) ジェームズ・フレーバー. 図説 金枝篇. 第6刷. 東京書籍. 東京. 1997 : 65
- 43) 本田濟, 易. 第6刷. 東京, 朝日新聞出版. 2010 : 541.

A Study of Oriental Medicine Health Care of  
“Kohshin-Koh” (1)  
— Classification of “San-Shi” According to Yin-Yang and  
Five Elements —

MASAKO MATSUDA

*College of Arts,  
Kurashiki University of science and the Arts,  
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan  
(Received October 1, 2011)*

“Kohshin-Koh” is an annual Taoist event that has been practiced regionally all over Japan for over 1,000 years by those wishing for perpetual youth and longevity, regardless of private faith. Despite the fact that the annual event shares common underlying principles with Oriental medicine, there is little interaction between the two fields today, except for a few temples and shrines.

This study attempts to apply “Kohshin-Koh” to Oriental medicine using the common underlying principles. An analysis of related phenomena according to the I Ching, which expresses Yin-Yang in symbols, clearly showed that the three worms that shorten people’s life spans correlated to the hexagram “xian” with its characteristic behavior represented by its eight trigrams “gen” and “dui.” Further, an analysis according to the five elements showed a strong correlation to the numbers two and seven and a correlation to gestures of incantation and taboo.

This paper examined the psychological functions that are influenced by symbols and imitative magic.